

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19601009
研究課題名 (和文) 求められる学生のキャリアデザイン力とその形成および教授学開発の実践的・総合的研究
研究課題名 (英文) Practical and Comprehensive Study of the Ability of University Students to Design Their Own Careers: Need for the Ability, the Growth of the Ability through University Learning, and its Pedagogical Development
研究代表者 飯吉 弘子 (IIYOSHI HIROKO) 大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授 研究者番号：00398413

研究成果の概要 (和文)：

現在の大学が抱えるカリキュラム上の新課題であるキャリア教育を考える際に重要な、「学生のキャリアデザイン力とその形成」についての、総合的かつ実践的研究を目指してきた。キャリアを個人の一連のライフプロセスやライフスタイルも含む広義のものとして捉え、とくにその知的側面に注目しながら、育成対象のキャリアデザイン力自体とその外的環境の両面から大学のキャリア教育のあり方 (含、カリキュラム・教育評価) を考えるとともに、キャリアデザイン力育成の方法論・教授法を研究・開発することも目指した。

研究成果の概要 (英文)：

Developing the ability of students to design their own careers is an important issue for Japanese universities. This study attempted to practically and comprehensively analyze this ability from the following aspects: the social and industrial need for the ability, the growth of the ability through university learning, and its curriculum or pedagogical development. This study focused on intellectual abilities, such as, thinking ability, self-learning, and self-criticizing, because these abilities are important for students for determining and planning their own careers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学 (時限)

科研費の分科・細目：大学改革・評価

キーワード：キャリアデザイン教育

1. 研究開始当初の背景

大学におけるキャリア教育は、現在の大学が抱えるカリキュラム上の新課題であると言える。大学のユニバーサル化や、グローバル化・知識社会化の進展を背景に学生の多様化と大卒学歴の相対的価値低下が進み、学生

の入学動機の多様化、学習動機の低下・変化 (不本意入学等) をもたらしめている (e.g. 溝上、2002)。在学中ドロップアウトや学卒就職後短期離職率の高まりもみられ、人生を通じたキャリアデザイン力の不足も指摘されている (e.g. 川嶋、2006)。

一方、産業界の能力育成要求が、とくに1990年代半ば以降大きく変化しており、教育成果としての学生の能力の質保証要求も高まっていることが明らかとなっている(e.g. 飯吉、2006)。こうした質保証ニーズの高まりを背景に、日本を含む各国で大学の教育成果・アウトプットとしての「学生の能力」を基点に、その育成のためのカリキュラム構築という考え方が広がりはじめており(e.g. 経済産業省調査 2006)。大学教育においてキャリア教育はますます重要課題となりつつある。

2. 研究の目的

本研究では、従来個々に行われてきた、学生のキャリアデザイン力自体の実態調査と大学への質保証ニーズの実態・変化の分析とを統合的に分析すること—すなわち育成対象自体と外的環境の両面から大学のキャリア教育のあり方(カリキュラムや教育評価のあり方)を総合的に考えていこうとした。また、単にカリキュラムのあり方を考えるのみならず、教育現場での実践の中で実際にキャリアデザイン力育成の方法論・教授法を研究し、具体的に提案していくことも目指した。

本研究は、必要性が増しつつあるキャリア教育を、大学の学士課程教育の中にどのように位置づけ機能させていくか、という大学改革の中の新しい課題への挑戦的研究であり、圧倒的に不足している大学教育についての基礎研究および教授学(ペダゴジー)研究の蓄積の一翼を担うものとしても位置づけられるものである。

3. 研究の方法

本研究では、デザインするべき「キャリア」や育成するべき「キャリアデザイン力」そのものと、進めるべき「キャリアデザイン力育

成教育」についての探索・検討も行いつつ研究を進め、それらの概念についての定義も研究代表者および研究分担者がそれぞれに模索しつつ進めた。

ただしいずれも、「キャリア」を労働や職業の経歴のみとして狭義に捉えるのではなく、個人の一連のライフプロセスやライフスタイルも含む広義のものとして捉えており、とくにその知的側面(自発的知的拡張力・自己相対化力等)に注目している点で共通した認識を持っているものである。また、本研究で扱う「キャリアデザイン教育」とは、多様な内容・側面をもつキャリア教育の中でもとくに、「大学の正課授業において教員主体で行うもので、かつ学生が自らの人生=キャリアを主体的に選択し、構築・デザインしていく力の育成を重視するもの」を主たる範囲としている。

このような共通認識の下、本研究では、大学教育におけるキャリアデザイン力育成に関して、以下の(1)~(3)の基礎研究を進めた。(本研究の全体像については、図1の構想図を参照されたい。)

(1) 学生のキャリアデザイン力の形成研究

<=図1のA>

(1)-①質問紙調査法による学生の発達の実態調査研究および(1)-②ゲームシミュレーションの手法によるキャリア観の研究)

(2) 外的環境変化研究 (言説資料研究による(2)-①日本の産業界の要求変化分析および(2)-②海外の産業界意見の調査研究) <=図1のB>

(3) キャリア教育教授学開発・研究 (①自らの教育実践研究および②国内外実践事例の調査研究・教材研究を通じた教授学開発・研究) <=図1のC>

そして最終的には、それらの(1)~(3)の研究

成果に基づいて、

(4) 総合分析 (大学におけるキャリアデザイン教育のカリキュラム構築と教育評価のあり方研究) <=図1のD>も一部試みた。

また、研究方法のよ

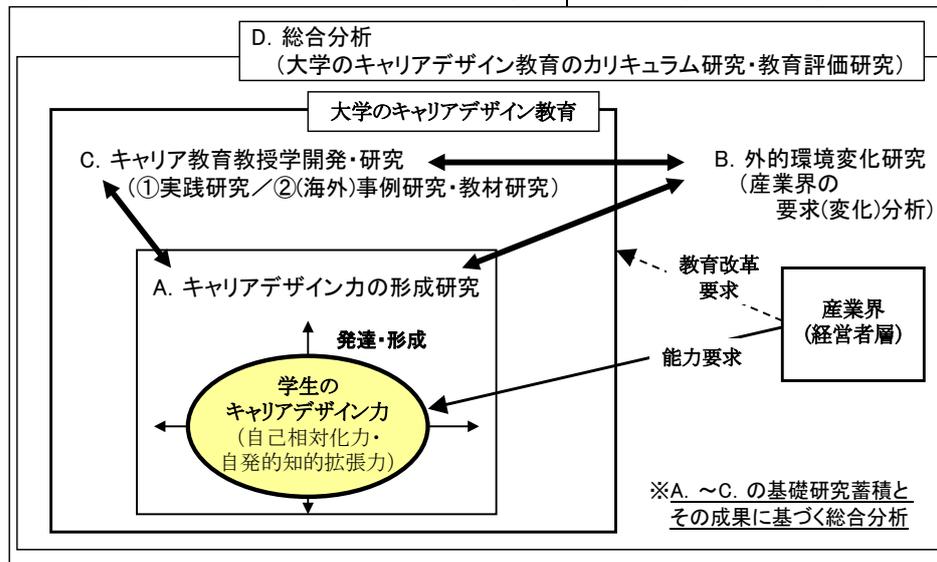


図1: 研究構想図

り具体的詳細は、次項の研究成果と共に記載することとする。

4. 研究成果

本研究は、キャリア教育のアウトプットとしての「学生のキャリアデザイン力」を基点とする上述の(1)～(4)の各研究を、以下の通り進めた。

(1)キャリアデザイン力形成に関する実証的研究：学生の発達の実態調査とキャリア観分析等

キャリアデザイン力のなかでも、知的側面(自己相対化力・自発的知的拡張力等)に注目して、学生の発達・形成の実態調査を実施し実証的分析を行うことを目指した。

従来の研究における学生の実態データは、ドロップアウト率や離職率等の行動指標が中心となっている。しかし本来は、それらの行動の背景となる学生自身のキャリアデザイン力やキャリア観を測定・分析しなければならない。本研究ではこれらに関する実態調査を行うことにより、より実証的で具体的なキャリア教育教授論の開発につなげることが出来ると考えた。学生にとっての新しい教育環境である大学教育における学習経験のあり方が、学生のキャリアデザイン力の発達変化に決定的な影響を与えていると予測し、それを確認することで学生のキャリアデザイン力形成を実現する大学教授学開発が可能になると考えたものであった。

これらの実態調査の中で、とくに、学生のキャリア観の知的側面の形成過程を明らかにすることを試みた。中でも、(1)-①大学教育における「書くこと」の機能を中心に、「書くことが学ぶことへの動機づけとして機能する可能性」に関する検討および(1)-②学生たちが自ら考え行動判断するためのキャリア意識・キャリア観とその形成の一側面を明らかにするための探索的研究を行った。このような知的側面のデータの蓄積はこれまで不足しており、知的側面データの収集・蓄積は本研究独自の成果といえる。

(1)-①の研究では、具体的には、「書くことは大学での学習の動機づけを促すか」について「バイオ工学演習Ⅲの学習活動に関する調査研究」を進め、この学習活動を通じた学生の学習内容の意味・意義の再認識に関する分析を行った。

すなわち、学士課程2年次の学生対象の「バイオ工学演習Ⅲ」における最先端の研究所見学とそれに関連するテーマに関するディスカッションや独自のレポート執筆作業が学生の今後の学習への動機づけとして効果があるかどうかを検討するために、キャリアデザイン力の形成に関する質問紙調査を実施し、その分析を行った。とくに「学習内容の意味・意義の再認識」「ディスカッションを行

ったことの意義の認識」「レポートの執筆に関連する思考力や学習動機」の3側面に関する調査を行い、学生と教材(研究所見学やディスカッション等)の関係のあり方と教育効果についての考察を行った

学問知を通じて学生に自己認識を深めさせるのは容易ではないが、大学という場は、あくまで学問知を通じた人格形成を促す場であり、「自己探求」や「自己発見」さらには「キャリアデザイン」というものを、学問から切り離して追及するのは適切ではない。ライティングの学習動機づけとしての機能は、これまでに学んだこととこれから学ぶことの意味の理解を深めるという意味でキャリアデザイン力育成機能とも言える。バイオ工学演習Ⅲの授業はこの点において一定の成果を上げていたとは言える結果を示した。

ただし、個々の教材のみ(見学に行くだけやレポートを書くだけ)では十分な成果が上がるとは考えにくく、レポートを書く前にディスカッションを重ねたこと等が総合的に作用して、ライティングを通じて学生の学習動機を高めたことが伺われる結果となった。

本側面の研究では、「教師」や「他者」の役割は必ずしも明確に示せなかった。キャリアデザイン力を育成する教育のあり方を今後さらに検討していく上での課題と考えられる。

(1)-②の研究では、学生のキャリアデザイン観形成に関する実践研究を、3年間の研究期間にわたって継続的にデータを取りその検証と実践内容の改善を行いつつ、遂行した。すなわち、ゲーミング・シミュレーションの一種である「人生すごろく」を活用することによって、学生たちがもつキャリア観の一側面を明らかにするための探索的取組みを実施し、学生がもつキャリア観についての直接的・間接的な多様なデータ総計185点を得て、その分析・考察・新たな実践を繰り返しながら行ったものである。

この研究では、キャリアの本質を、「自身を取り巻く環境の中でいかに現実と折り合いをつけ、自分の頭で考えて行動し、その行動の責任をとりながら、自分にとってよりよい生き方をするかを自身が決めていくこと」ととらえ、このようなキャリア意識についての学生の「新たな気付きを促す」ための「仕掛け」として「人生すごろく」を活用した。

結果、「人生すごろく」の作成が、学生にとっての「キャリアの棚卸」(自己概念を明確化し将来を展望するための基礎作業として、自らの過去を見つめ現在に至る道を確認すること)として位置づけられ、過去と今を踏まえて今後を発展させていく仕掛けとして機能しうることが示唆された。また、このようなプログラムが学生のキャリアに対する自覚/意識の向上に一定の効果をもつ可能

性も明らかとなった。

(2) 外的環境変化に関する基礎研究：産業界ニーズの多層的分析

学生のキャリアデザイン力への産業界ニーズ(変化)の多層的分析を通じて、急速に変化する現代という社会の方向性を読み解き、今後の社会で個人にとって必要となる力を考察し、大学教育段階で育成を担うべきキャリアデザイン力の考察・明確化を図った。一生を通じて様々な人生を選択しそれらの結果あゆむライフコース全体に関わる力である「キャリアデザイン力」に対する外的要求変化を分析するためには、近年の多くの先行研究で進められている就職採用時点の要求分析に限らない、キャリア全体への視野を含む意見の分析が必要であると考えた。そのため本研究では、経営者層の見解変化の多層的分析を目指した。

既収集の大企業を中心とする産業界経営者層の提言資料や研究成果を活用しつつ、①とくにキャリアデザイン力とその育成という観点に焦点化して分析を行い、②さらに関西経済同友会など地域別団体の要求も一部収集して分析を進めた。加えて、③米国の経済界経営者層の能力要求についても確認し、キャリアデザイン力に対する産業界ニーズの多層的な分析を行った。

その結果育成すべきキャリアデザイン力について、とくに知的側面のなかの「自律的に学び考え続け行動する力」が、個人が21世紀の社会や世界の中で産業界の文脈を超える幅広い文脈の中で生きぬくためにも、今後の社会においてイノベーションを担う人材を育成する観点においても重要であることが明らかとなった。この「自律的に学び考え続け行動する力」とは、すなわち課題発見解決力・自律的学習力・論理的/批判的思考力など(=自発的知的拡張力)や世界・社会・組織全体の中で自らの役割と位置を理解し見つめていく力など(=自己相対化力)などが主に含まれる。

また、その育成を大学は、大学本来の機能・活動の中で担っていく必要性があることを見いだした。

(3) 教授学研究・開発

本研究では、自らの教育実践と海外のキャリア教育実践を中心とした事例調査やキャリア教育教材研究を通じた教授学研究をすすめ、キャリアデザイン教育における教授法の開発や教育の際の視点の検討を行うことを目指した。

(3)-①教育実践による教授学研究・開発

自らの教育実践において、国内外の実践事例調査や教材研究成果も取り入れつつ、その実践の内容・方法・効果等の測定や検証・分析

を行った。研究代表者が担当するキャリアデザイン教育系科目はもちろん、代表者と研究分担者がその他に担当する、キャリアデザイン力の育成に関わる複数の共通教育科目等を中心に実践研究を進めた。それらを通して、具体的教授法の開発と教授学研究を推進することができた。

日本の大学教育での教授学研究・教授法開発の蓄積は、日本の初中等教育段階や米国等国に比して圧倒的に不足している。キャリアデザイン力育成に特化して調査研究と実践的研究の成果の蓄積を行えた点は本研究独自の成果であると言えよう。

このような「キャリアデザイン力育成に関する教育実践における教授法研究」として具体的には、以下の4研究を進めた。

すなわち、まず1点目の研究として、同一教員が担当する100人前後~200人を超える「全学共通教育の多人数講義科目2種における学生による学修活動の効果の評価の継続的分析」を実施した。多人数授業内での自ら考えさせ・学ばせる教育効果を意図した仕掛けとその取り入れ方・全体としてのバランスや効果についての検証を通じた教授法開発の取組を行った。授業内小レポートや文献探索型およびインタビュー型レポートの効果などの各種の仕掛けとその組み合わせがキャリアデザイン力育成にどのような効果があったのかを検証するために学生アンケートを3年間にわたって実施しつつ進めた。

検証の結果、中ではインタビューなど他者に働きかける活動を伴いつつ授業内容ふまえて統合的に考えまとめるレポート(期末)の効果が高い可能性が明らかとなった。また、同一教員が行う授業であっても、その科目の目的や毎回の構成の違いおよび考えさせたり書かせたりする対象(扱うコンテンツ)の違い等によって、同じ仕掛けや組み合わせであっても、その効果の生じ方に相違があることが確認された。とくにこの場合のキャリアデザイン力育成でとくに重視したのは、「自立的に学び考え続けるための動機づけ」や「自己や自分の所属場所・学習内容を相対化させる」力の育成という側面であったが、これらの側面に関わる教育は、1科目や1教授法で完結するわけではないことも改めて指摘できた。

このほか上述の(1)-①の研究にある学部専門教育の演習授業における教材(研究所見学とディスカッション等)とライティングとの組み合わせによる授業構成の効果の検討や、(1)-②の研究でも言及した全学共通教育科目における、「人生すごろく」というアクティブラーニングのゲーミング・シミュレーションの一種としての教授手法・プログラムの効果の検証なども、本研究における、教授学研究・開発に関わる第2・第3点目の研究と

してあげられるものである。上記(1)で述べた通り、教材とライティングの組み合わせや、「人生すごろく」を用いた大学生向けキャリアデザイン支援教育プログラムが、キャリアデザイン教育としても効果がある事が確認されている。

また実践的教授学研究第4点目として、全学共通教育の心理学に関する講義科目における各種レポートライティングを取り入れた教育とその効果についての検証も行った。ライティングを取り入れた教授法のあり方・可能性について、学生の反応をふまえて検討した。ミニレポートやレポートの設問の工夫やレポートの課し方と学生の反応についての実践的研究成果の検証・考察を行った。

以上のいずれも、個別の授業内での検証と考察であるが、それらの取り組みの方向性・あり方を他の科目に応用したり、他科目での工夫のヒントとしたり、あるいは既存のカリキュラムの中にさまざまな形で埋め込んだりしていける可能性が見えた。またそれと同時に、キャリアデザイン力育成に関わる教育は、1科目で完結するものではなく、キャリアデザインに関する科目に限らず、全学共通教育や専門教育等全体にわたる、多様で多層な教育を通して行っていく可能性も見いだせた。

(3)-②国内外実践事例調査・教材研究による研究・開発

キャリアデザイン教育の教授法開発にむけて、米国で開催された第27回クリティカルシンキング国際年次大会やキャリア開発国際大会等を初めとする国内外の学会・セミナー等への参加、および国内外のキャリア教育・開発や批判的思考力育成に関する教材や参考文献等の収集と研究を通して、国内外の教育実践事例研究や教授学研究を行った。

とくに米国の年次大会への参加を通して、クリティカルシンキング(以下、CTと略す)をめぐる多様な事項に関する網羅的知見・経験を得ることができ、CTとその育成について多角的に検討することができた。具体的には、CTの育成に際して役立つ教授法に関する各種の取り組み事例の紹介に加えて、CT育成に際する教員の側の陥りがちな問題、CTにとって重要な学生への問いかけの方法・鍵といった教員側の事項から、学生の側の問いかけ方・学び方、カリキュラム改革の進め方の事例、CTの評価とそのツールの問題に至るまで、多様な紹介と検討が行われた。

同大会は全日程を通じて、参加者が能動的に関わるグループワークを取り入れたワークショップ形式であったため、CT育成に関する理論に限らず、教育技法・方法論・教授方の考え方の方向性などについて知識をただ一方的に得るのではなく、双方向的に経験・実

感を通して検討・会得することができ、本研究の(3)-①の実践研究においても生かすことができた。

(4)総合分析

以上の(1)～(3)の基礎研究及び実践研究の3年間の成果をもとに、キャリアデザイン教育のカリキュラムのあり方とその教育成果の評価について、研究代表者・研究分担者がそれぞれが、現時点で出来る限りの総合的考察を試みた。(本研究にあたっては、教育学および教育史・教育心理学・社会心理学という異なる専門分野の3名が共同で研究しており、それぞれがそれぞれの手法によって、多角的な分析・考察を試みたこととなる。)

本研究では、育成すべきキャリアデザイン力について、上述の通り、とくに知的側面のなかの「自律的に学び考え続け行動する力」は、個人が21世紀の社会や世界の中で産業界的文脈を超える幅広い文脈の中で生きぬくためにも重要であり、その育成を大学も大学本来の機能・活動の中で担っていく必要性を見いだした。具体的には、とくに以下の2つの教育を進めていくことを仮説的に提案した。すなわち①自分で問い・考え・解を導こうと取り組み続けられる力の育成を重視した教育を行うこと(ここには試行錯誤しつつ考える訓練・クリティカルシンキング・論理的アカデミック思考力の育成が含まれる)および②自己および自分の専門分野をも相対化できる力を習得させる教育(これは多様な他者との学びや相互理解の中で学ぶことや課題設定・解決の道筋・方法の多様性について学ばせることなどが含まれる)の2点である。

上述の(3)の実践研究は、キャリアデザイン力育成に関わるこれら2点の教育の、具体的なあり方や方向性の可能性を探ったものであると位置づけられる。

(5)今後の課題・展望

今回の研究では、今後の学士課程のキャリアデザイン教育におけるクリティカルシンキング力を初めとする「自発的思考力」育成の重要性の高まりを確認し、キャリアデザイン力の幅広い知的側面の力の育成に関する教育実践的研究をそれぞれの授業実践等を題材にし、学生の反応や状況を詳細に検証・分析しながら多角的な研究を進めることができた。これらの実践的研究における各種教授法の開発を今後も継続しつつ、その教育効果の評価に関する研究についても、一層進め発展させていく必要があると考える。

また、本研究において明らかとなった今後の課題として、以下の3つの側面を指摘することができる。すなわち今後は、①大学のカリキュラム全体におけるキャリアデザイン力育成の段階的・体系的で多層的な教育の具

体的あり方の可能性の研究や②教育の効果・成果の測定方法(定量的・定性的評価両面)の検討と共に、それを目に見える形で提示する可能性と限界の検証・考察や、③各教育実践における教員や他者のあり方や役割のあり方のより詳細な検討などを深める必要がある。

とくに①については、キャリアガイダンスの義務化等の現在進みつつある状況の中で、新たにキャリア系科目を1~2科目立ち上げる等の安易な対応をするのではなく、すでに従来から行ってきた大学の本来的教育を重視しながら、その中で効果ある学習成果を導き出せる可能性を模索するためにも重要である。また②についても教育効果の安易な評価のための評価ではなく、学び手である学生にとってあるいは学生を教育する教員のより良い教育活動のために意味ある評価のあり方を考える意味でも重要な課題である。

これらの課題もふまえて、今後は、今回の研究グループによって、初年次教育やキャリア教育のみに限らない大学教育全体における「思考力」育成実現の可能性に関するより幅広く総合的な研究についても、発展的に目指したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①飯吉弘子「「21世紀型」教養教育の再検討—一日米比較と産業界要求・教育実践の視点から—日本教育学会『教育学研究』第76巻第4号、2009年12月、pp. 40-53、[査読有]
- ②飯吉弘子「学生参加型自校教育の実践と成果—「現代社会と大学」(講義)の取組と125年史小冊子」『大阪市立大学史紀要』第1巻、2008年10月、pp. 50-61

[学会発表] (計3件)

- ①飯吉弘子「教養教育としてのキャリアデザイン力育成のあり方—自ら考え続ける力とその教育実践の試み」大学教育学会第31回大会自由研究Ⅱ「学生とキャリア」発表、2009年6月7日、首都大学東京
- ②西垣順子「授業のなかで学生の何が育てられているか—学習スキル・コミュニケーション・推論/思考・リテラシーの観点から—」指定討論、第15回大学教育研究フォーラム(ラウンドテーブル)、2009年3月21日、京都大学
- ③渡邊席子「キャリアデザイン力支援とゲーミング・シミュレーション」大学教育学会第29回大会自由研究発表IX、2007年6月

10日、東京農工大学

[図書] (計1件)

- ①飯吉弘子『戦後日本産業界の大学教育要求—経済団体の教育言説と現代の教養論』東信堂、2008年2月、435頁

[その他]

- ①報告書：研究代表者飯吉弘子『求められる学生のキャリアデザイン力とその形成および教授学開発の実践的・総合的研究』(平成19~21年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究課題番号19601009研究成果報告書)2010年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯吉 弘子 (IIYOSHI HIROKO)
大阪市立大学・大学教育研究センター
・准教授
研究者番号：00398413

(2) 研究分担者

渡邊 席子 (WATANABE YORIKO)
大阪市立大学・大学教育研究センター
・准教授
研究者番号：60320579

西垣 順子 (NISHIGAKI JUNKO)
大阪市立大学・大学教育研究センター
・准教授
研究者番号：80345769

(3) 連携研究者

なし